

1920年製作の丸ノ内ビルディングの接地板

管理者—村田電機製作

東京駅前の丸ノ内ビルディングは1923年2月に竣工した。この埋設接地極板は20年1月に完成した設計図を基に施工された、当時の電気設備用・避雷設備用埋設接地極で、解体までの75年の間、地中にあったもので、当時の設計図に記載のとおり場所に埋設されていた接地極である。

発掘されるまでの75年間に、電気設備の技術分野は内容も機能も大きく変化した。現在では接地方式も新しい考え方が確立されているが、この接地極は、わが国の産業技術史の建築設備の歴史を語る上でも貴重な資料である。

設計図は地中に大型と一般型の2種類の銅板の極を埋設する仕様であった。この銅板の極と土壌の間には2㌘（約60㌘）の幅で細かく砕いた炭を充てんする仕様になっている。

発掘された埋設接地極は、地質にもよるが従来、地下に埋設された接地極は腐食などで極自体が縮小する。場合によっては消滅するなどの説があると言われていたものだが、この説を覆す結果を教えてください。電気設備に関する部品や材料は、建物解体とともに廃棄されることが多い中で、当時の施工方法や材料などを研究する上でも貴重な資料である。

J
A
B
M
E
E
13
年
度

建築設備技術遺産

④